

〔書評〕

佐藤猛，佐々木千佳編『ペストの古今
東西～感染の恐怖，終息への祈り～』

花房秀一

〈目次〉はじめに
内容の紹介
本書に対するコメント

はじめに

2023年5月5日に、世界保健機構（WHO）が新型コロナウイルス（COVID-19）の緊急事態宣言の終了を宣言してから、1年以上が経過した。日本で新型コロナウイルスの感染が初めて報告されたのは、クルーズ客船ダイヤモンド・プリンセス号内で集団感染が発覚した2020年2月5日であるので、我々はこの未知なるウイルスとの戦いに、3年以上もの月日を費やしたということになる。この間、「新しい生活様式」が実践され、マスクの着用、手洗いうがいの推奨、「3密」回避の徹底など、完全予防を前提とした生活スタイルが確立した。感染防止のため、人々は学校や会社に一堂に会するのを避け、遠隔授業やリモートワークが実施された。このような緊急事態において、我々は自然と、過去のパンデミック下では、人々はいかに疫病と対峙し、それを克服していったのか、あるいは疫病が蔓延する社会の中で、人々は何を考え、どのように行動していたのかに、関心を向けるようになった。

本書を執筆したのは、秋田大学に所属する5人の人文学研究者である。各人の専門分野は歴史学・文学・美術と多岐にわたり、それぞれの専門の視点から、洋の東西を問わず各地で起こったペスト禍について論じている。本書に掲載された内容は、元々秋田県の地元紙である秋田魁新報において「感染症・世界×文化」というタイトルで、2020年10月から12月にかけて掲載された。それを改めて一冊の書籍に編纂し直して2022年9月に出版されたのが、『ペストの古今東西～感染の恐怖、終息への祈り～』である。

本書の構成は以下のとおりである。

はじめに—コロナ禍から古今東西のペストへ—

第1章 百年戦争下のパリと死に至る病

第2章 ヴェネツィア美術に見るペストの表象と救済

第3章 ペスト禍のシェイクスピア

第4章 ペスト菌に抗した中国

第5章 満州国の中国人作家がみたペスト禍
おわりに—未来への架橋としての記録と記憶—

以下、順を追って本書の内容を紹介していく。

内容の紹介

第1章「百年戦争下のパリと死に至る病」（佐藤猛）は、ヨーロッパの全住民の3分の1を死亡させたといわれる14世紀中葉のペスト大流行時、パリの住民がその疫病の到来をどのように受け止め、その災禍をどのように生き抜こうとしていたのを論じたものである。本章で扱われている史料は、キリスト教の修道士、医学教師、そして王権といった社会の上層部が書き残したものであるが、そこからペストに対する庶民の態度も浮かび上がらせている。

修道士が書き残した史料としては、サン・ドニ修道院で書き残されたフランス王家の公式記録でもある『フランス大年代記』が取り上げられている。この史料ではペストという言葉は用いられず、その代わりに「死に至る病」が到来したと書き残されている。また病気の原因が細菌やウイルスによるものだということを知らなかった当時、人々はペスト禍において宴会を催したり、暴飲暴食をしたり、性的快楽に興じたりしていたことが書き残されている。一説には、ストレス発散により免疫力を高め、ペスト菌の感染を防止したともされる。しかしこのような人と人との接触を伴う行動は、多くの場合ペストの感染拡大を促すものになったはずである。

修道士や医師が書き残した史料には、罹患者に見られる瘤や腫れなどの病気による症状が克明に記録されている。現代の我々は、未知の病気に立ち向かってきた人々の詳細な記録によって、この疫病がペストであったと推測できるのである。このように目に見える現象を観察者としてできるだけ精緻に描写していたのに対して、目に見えないもの、すなわち病気の原因について

は、中世ヨーロッパの宗教観や社会観が史料の叙述に大きく影響を与えている。例えば、ペスト大流行に先立って出現した彗星や電、惑星の配置によって引き起こされると考えられていた腐敗した大気などが、疫病をもたらした原因であると考えられていたのである。

また本章では、ペストによってもたらされた社会の変化についても述べられている。例えば、ペスト大流行後に発布されたパン屋のギルドに関する王令からは、ギルドの規定に決められた額よりも多くの手間賃を受け取る者、あるいはそれを要求する者がいたことがわかる。これはペストの大流行によって、パリの労働人口が減少したため、労働者一人当たりの賃金が上昇していたことを意味している。労働人口減少に伴う賃金の上昇はパン職人以外でも見られ、「雇われ人、農夫、召使」の賃金が2倍になったと史料に記されている。

第2章「ヴェネツィア美術に見るペストの表象と救済」(佐々木千佳)は、東方貿易で繁栄を遂げ、国際都市となったヴェネツィアにおけるペスト大流行と、ヴェネツィアに残された様々な美術作品にみられるペストの影響について論じている。ヴェネツィアはその海洋交易を通じて、ヨーロッパにおけるペスト菌侵入の玄関口の1つとなった。そのため保健衛生政策が比較的早期から実施され、検疫と隔離体制が整備された。1348年3月には、入港しようとする船舶に停泊と隔離期間を設け、その後これが前例となって、30日間、あるいは40日間の検疫隔離が実施されるようになった。

このようにヴェネツィアでは合理的な防疫体制が実施された一方で、疫病の原因については、中世ヨーロッパの他の地域と同じく、神から与えられた罰であり、祈祷や罪の改悛を通じて癒されると考えられていた。その影響は美術面にもみられ、様々な類型の恐ろしい「死の勝利」や「死の舞踏」といった終末論的な図像が生み出された。

この時期にヴェネツィアで流行した図像として、災禍の雨から庇護してくれる存在である聖母が挙げられる。ペスト以降に流行した〈慈悲の聖母〉では、聖母が大きく外套を広げて、その内側に庇護され、その中で身を寄せる

者たちが描かれている。聖母は神の懲罰から人々を庇護し、執り成しを仲介してくれると考えられていたのである。

聖母の他にも、聖セバスティアヌスが、ペストから人々を庇護してくれる存在として、しばしば図像のモチーフとなった。古来、病の原因とみなされていたアポロンの矢に由来する象徴性から、矢で体を射抜かれた聖セバスティアヌスは、ペストに対抗する守護聖人として人々の崇敬を集めるようになった。またサタンによって頭のとっぺんから足の裏まで皮膚病に犯された聖ヨブや、人々の看護に尽力し、自身もペストから生還した聖ロクスも、ペスト禍において注目を集めた。1630年のペスト大流行に際して建造が決定されたサンタ・マリア・デッラ・サルウテ（健康の聖母マリア）聖堂内には、《ペストに罹患した人々の前に現れる聖母》が描かれている。その中には聖ロクスも描かれ、美術作品に込められた当時の人々の疫病鎮静の願いが見て取れるのである。

第3章「ペスト禍のシェイクスピア」（佐々木和貴）は、その生涯のうちに幾度もペスト大流行を経験したウィリアム・シェイクスピア（1564～1616年）の作品にみられるペストの影響について論じられている。

ペストと共に生きたシェイクスピアには、意外なことにこの疫病を正面から扱った作品はない。唯一『ロミオとジュリエット』の中に、それとわかる形で作中に織り込まれているだけである。筆者はこの理由として、おそらくペストという素材が、直に舞台にのせるにはあまりに生々しかったからではないかと推測している。ただ直接的には扱わなかったにしろ、シェイクスピアの作品には、ペスト禍の影響が影を落としていると考えられるのである。

先に述べたように、『ロミオとジュリエット』にはペストの流行が描かれている。二人の恋の仲立ちをつとめる修道僧ローレンス神父は、ジュリエットが薬を飲んで仮死状態になり、墓所でロミオが来るのを待っているという内容が認められた手紙をロミオに届けるように、同僚のジョン神父に託す。しかしジョン神父は検疫官にペストの濃厚接触者と疑われ、戸外に出られなくなってしまうため、ロミオに手紙を届けることができなかった。このた

めロミオは墓所で仮死状態になっているジュリエットが本当に死んでしまったと思ひ込み、彼女の脇で服毒自殺し、蘇生したジュリエットも変わり果てたロミオの姿を見て、短剣で自らの胸を突くのである。このようにこの悲劇の中では、ペストが2人のすれ違いの遠因となっているのである。

『ロミオとジュリエット』以外のシェイクスピアの作品には、直接ペストが描かれることはなかったが、それを想起させる台詞が見受けられる。『リア王』では、忘恩の仕打ちに激怒したリア王が、長女ゴネリルに対し、「吹き出物 (boil) だ、腫れ物 (plague sore) だ、膿ただれた腫瘍 (carbuncle) だ」と罵る。この台詞から、舞台を見た当時の観客は、間違いなくペストに感染して硬く膨れたリンパ腫腺を連想した。シェイクスピアはこの台詞を介して、観客に舞台の世界とペスト禍のロンドンをつないで見せているのである。このようなフィクションである作品を通じて、現実世界のペストを想起させる手法は、『マクベス』でも用いられている。シェイクスピア最後の単独作品となった『テンペスト』でもペストは直接描かれていないが、シェイクスピアが体験したペストからの引きこもり生活の影響が、この作品にみられる。外界とは接触のない孤島を舞台としたこの作品は、ペストとの避けがたい共生を暗示したのものであるとも解釈できるのである。

第4章「ペスト菌に抗した中国」(内田昌功)は、中国におけるペスト流行の歴史について論じたものである。歴史上、中国でも幾度ものペストの大流行が起こったが、ヨーロッパと異なり、社会構造を変化させてしまうような甚大な被害はなかった。そのため本章では、ペストの地域による被害の多様性と、その原因について述べられている。

通説として、中国でのペストの初めての発症は、史料に「悪核」という病氣として記録された7世紀前後に遡ると考えられている。次いで13世紀にも雲南省とミャンマー周辺でペストの流行が起こり、この時のペスト菌がモンゴル帝国の拡大と共に西方に伝播し、14世紀半ばのヨーロッパにおけるペスト大流行の原因となった。17世紀には山西省でペストが発生し、河南省や河北省、長江下流域にまで拡大していった。19世紀に流行したペストは、香港

から世界に広がり、パンデミックを引き起こした。

しかし医学が発達した近代のペスト禍は別として、前近代の流行については、それが本当にペストによるものであったのか、筆者は疑問を投げかけている。例えば、隋唐代の資料にみられる「悪核」は、腺ペストの症状に酷似しているものの、異なる点も多く見られ、感染症の特徴も見られない。そのため「悪核」をペストと考えるのは難しいとの結論を下している。

またヨーロッパにおける14世紀のペスト大流行の原因となったとされる雲南省のペストについても、筆者は疑問を呈している。中国で13・14世紀に致死率の高い疫病が流行したことは確かだが、これをペストであるとは特定できない。この従来の定説に対して、筆者はヨーロッパのペスト禍の発祥地を、中央アジアのイシク・クル湖周辺とする説を紹介している。

17世紀に流行した疫病は、その症状の特徴からペストであったと考えられる。このペストは史料では疙瘩瘰と呼ばれ、おそらく山西省の北方のモンゴル高原から中国に伝播した。疙瘩瘰は関節に腫物を生じ、食欲不振、めまい、発熱、吐血などの症状があり、発症すると2・3日で患者は死亡した。この疙瘩瘰は12世紀以前にも流行していたことが知られており、それが中国における初のペストの流行であったと考えられる。

また本章では、なぜ中国ではヨーロッパのようにペストの被害が甚大にならなかったのかについても考察されている。筆者は中国におけるペスト流行の特徴をあげつつ、ヨーロッパで数世紀にわたりペストの感染が繰り返されたのは、流入したペスト菌がヨーロッパに根を下ろし、安定して生息できたからであると指摘している。中国では、特に黄河・長江の中下流域では、何らかの要因でペスト菌が根付くことはなかったのである。

近年のDNA研究によって、ペスト菌の発祥地は青海地方とその周辺に絞られた。ペストはこの地から人の移動、とりわけ交易や戦争によって、中国やヨーロッパにもたらされたのである。

第5章「満州国の中国人作家が見たペスト禍」(羽田朝子)は、1940年に満州国の首都新京(現・長春)で起こったペスト大流行の経験を基に、1944年

にその災禍を文学化して小説『新生』を創作した古丁（1914～64年）について述べている。古丁は瀋陽にある東北大学や北京大学で学び、後に満州国國務院法制局に就職し、統計処事務官、企画処事務官、民生部編審官を歴任した。このように満州国の官僚として順調にキャリアを積む一方で、古丁は文学活動も熱心に行った。1940年には『平沙』で民生部大臣賞を受賞し、これによって満州国を代表する中国人作家として名を知られるようになった。

古丁の小説『新生』は、新京でペストが大流行した1940年10月、近所でペスト患者が出たため、隔離生活を余儀なくされた経験を基に執筆された。物語では、主人公の「私」が家族と共に隔離病院に収容され、集団生活を強いられた1カ月近くの期間が描かれている。その中で知識人である「私」が、近代的な科学知識によって難を乗り切ろうとするとともに、科学的知識を持たない周囲の中国民衆との間に、大きな溝が生じる様子が描かれている。

例えば「私」は、ペスト菌がノミを宿主として感染を広げることを知っており、自分の上着にノミが付いていないか執拗に探すが、その知識のない妻には神経質だと責められている。また漢方医ですらペストに関する知識が欠如しており、頭が痛くて熱が出る病気であるという認識しかない。

作中では、隔離病院に収容された日本人も多く登場するが、彼らは中国人とは対照的に、社会的な啓蒙を受けた模範的な存在として描かれている。「私」は病院で日本人と共に生活する中で、規律や公益を重視する市民精神や衛生観念の面で、日中の格差を目の当たりにする。「私」は中国民衆に対する啓蒙活動の必要性を痛感し、秩序の遵守や衛生意識の必要性を呼びかけた結果、人々の間で徐々に変化が現れたことを認めるのである。そして物語の終盤、退院した「私」は、一緒に死線を潜り抜けた日本人の秋田さんと共に祝杯を挙げる。このように『新生』は日本人を模範として描き、民族協和を謳歌する作品であった。

しかし、古丁が実際に経験したペスト禍の体験は、またこれとは違う一面も持っていた。古丁が隔離されると、それまで親しくしていた満州国の日本人作家たちは急に冷淡になり、義捐金も集めなかった。隔離病院では、日本

人には白米が供給されるのに対して、中国人には白米ではなくコーリャン米が出された。古丁の一家もコーリャン米を食べなければならず、これを食べなれない彼の子供が泣きだすと、威張り腐った日本人の看護婦が怒鳴り散らしたのである。日本人と中国人の区別は食事だけではなく、便所にまで及んだ。中国人の便所には「他人（日本人のこと）の便所に行ってはいけない。さもなければ不日出所できない」と書かれていた。民族協和を掲げているはずの満州国が、はっきりと民族を区別し、中国人を後進的で不衛生な人々として差別していたのである。

本書に対するコメント

以上、『ペストの古今東西～感染の恐怖、終息への祈り～』の内容を、各章ごとに紹介してきた。本書が扱っている歴史的・地理的射程範囲は非常に広く、古代から20世紀まで、西ヨーロッパから満州国にまで及んでいる。そのため中世フランス史を専門とする筆者にとって、本書の全ての内容に対して、的確に批評を行うことは困難である。従って、ヨーロッパ史の内容を中心に、以下述べていきたいと思う。

14世紀半ばにヨーロッパ全域で猛威を振るったペストについては、多くの日本人が高校の世界史で学んだことであろう。ヨーロッパに上陸したペスト菌は、当時の通商ルートを通してヨーロッパ各地に伝播し、わずか数年間に全人口の3分の1もの人々の命を奪ったといわれている。本書でも触れられた通り、中世の人々はこの未知の疫病の原因を「神の怒り」に求め、神の許しを得るために鞭打ち苦行が流行した。また芸術面では、以前より身近になった死への畏れを表すように「死の勝利」や「死の舞踏」などの図像が発展した。しかし、一般的に教科書に書かれているのはここまでであり、ヨーロッパ社会をドラスティックに変化させたペスト禍の影響については、教育現場ではあまり学んでこなかったのではないかと思う。

本書でも述べられている通り、14世紀半ばのペスト大流行以降も、ヨーロ

ツパでは定期的にペストの流行が起こった。第3章で述べられているように、シェイクスピアが活動していた時期のロンドンでは、実に3度もペストの大流行が起こった。ヨーロッパの他地域のペスト禍の記録を見ても、おおよそ10年から20年に1度の周期で、この疫病の流行が繰り返されたことが分かっている。被害に関しても甚大で、例えば15世紀のドイツ南部の都市アウグスブルクでは、人口2万人弱であったこの都市において、1度の流行で約6,000人もの人々の命が奪われていた。⁽¹⁾

また都市部だけでなく、ペスト禍による農村の荒廃も深刻であった。次に取り上げる史料は、1365年に出されたボルドー司教区の農村の荒廃を訴えた公正証書である。

(前略) 保有農たちは生前にボルドー近郊のサン・ジュリアンと呼ばれる場所にいくつかの家屋を封として所持し、保有しており、その代償に彼らは年々定量地代(サンス)を支払うことを義務づけられ、また領主の交代に際しては一定額の封相続税を支払っていたということである。これらの保有農者たちは死亡したが、これらの家屋が帰属するはずの彼らの相続人、また他の者の誰一人として彼らの領主たる参事会とその会長の下に姿を現さず、また彼らの権利を知らせることもなく、また、これらの物権の然るべき定量地代も払っていない。(後略)⁽²⁾

この史料からは、ペストの大流行によって農村が荒廃し、家屋や耕作地が放棄されたことが推測される。実際には、新たな開拓地の減少や天候不順による食糧生産の減少によって、すでにペスト前から農村の衰退が進行しつつあったのであるが、ペスト禍による大規模な人口減少は、農村の荒廃を決定づけることになったと考えられるのである。

このようにペストの大流行により、定期的に人口減少がおこる中世後期から近世のヨーロッパでは、否応なしに社会や経済の仕組みの変革を体験することになった。第一に指摘できる社会の変化は、第1章で述べられているように、労働人口の減少と、それに伴う1人当たりの人件費の上昇である。1351年の王令からは、ギルドの規約によって定められた手間賃以上の費用が、パン職人に支払われていたことがわかる。王権はこの王令で急激な人件

費の高騰を防ぐため、従前の規定よりも3割増しの手間賃を受け取ることを認めたのである。

このような人件費の高騰は、同じ時期のイングランドにもみられた。フランス王権は一定の賃金の上昇を認めることで、労働人口減少による社会の混乱を解消しようとしたが、イングランドでは領主層の利益を守るために、王権は1349年と1351年の2度にわたって、農民の賃金をペスト禍以前の水準に戻そうとした。イングランドでは1381年にワット・タイラーの乱が発生するが、領主層の経済的抑圧に対する反発があったことは、多くの農民層が参加した反徒側の要求の中に見つけることができる。

(前略) 民衆の指導者ワット・タイラーは民衆の名の下、国王に次の事項を要求した。すなわち、国王と法に対する反逆者を捕え、彼らを処刑する。民衆は農奴ではなく領主に対する臣従も奉仕の義務もない、地代は1エーカーにつき4ペンス⁽³⁾とする、誰しも自らの意志と正規の契約の下でなければ働かなくてよい。(後略)

ポスト・ペスト社会における第2の変化として、生産体制の効率化が挙げられる。労働人口が著しく低下した農村部では、領主層は農産物価格の低下や貨幣経済の浸透も相まって、直営地の小作請負制への転換を余儀なくされた。すなわち、領主層は土地の貸与契約を農民と結び、借地料として定期金(ラント)を受け取る形態が広がったのである。このことは農民にとって、賦役として直営地で労働するよりも、経済的なメリットがあったと言えるだろう。また領主にとっての経営の効率化という面では、イギリスの囲い込み運動や、東欧の農場領主制の発展など、いわば資本主義的な農業経営がはじまったことも、ポスト・ペスト社会の大きな変化である。

技術的な面においても、労働人口の減少を受けて大きな変革が見られた。例えば14世紀半ば以降、人的労力の減少を補う形で、水車を動力源とする機械化が進展していった。水車自体は以前から利用されており、主に麦の製粉に用いられていたが、カム軸やクランク技術の普及によって、中世後期には材木の切断機や棒状鉄生産のための圧延機、鉱山の排水装置などの動力源と

して、水車の多角的利用が行われるようになった⁽⁴⁾。また生産体制の面でも、中世ギルド的な個人経営から、生産規模も資本も大きな工房への発展がみられ、問屋制商人に代表される新しい経営者や経営体制が現れ始めるのもこの時期である⁽⁵⁾。

総じて言えば、ペスト大流行後の社会では、労働条件の向上と、後の大量生産・大量消費社会へと繋がる資本主義的経営体制の萌芽が見られたのである。

ところで、このようなペスト禍による社会の変化を顧みることで、現代に生きる我々は、いかなる教訓や将来への示唆を得ることができるのであろうか。ペスト大流行後の社会と現代日本社会を比較すると、程度の差こそあれ、双方に共通するのは人口減少社会の到来である。もちろん現代日本の人口減少の原因は、疫病による大量死ではなく、少子化によるものであり、コロナ禍以前から進行していた問題である。しかし、コロナ禍によって少子化が一段と進んだのは確かである⁽⁶⁾。

労働人口の減少が賃金の上昇をもたらしている点も、ポスト・ペスト社会と同様である。もちろんそれは人手不足だけではなく、円安や物価高など複数の要因が重なった結果ではあるが、2022年以降、大手企業を中心に賃上げ⁽⁷⁾を発表する動きが目立っている。

また労働環境についても、コロナ禍を経て大きな変化が起こった。冒頭でも述べた様に、遠隔授業やリモートワークが一般化し、人々のライフスタイル自体に大きな変化が見られた。またAI技術の発展は、今後減少していく労働人口を補う要として、多大な期待が寄せられている。

ポスト・ペスト社会では、水力を利用した労働作業の機械化や大量生産化、初期資本主義社会への移行が見られた。労働人口が著しく減少しつつある現代日本でも、そのような社会的変革は見られるのであろうか。本書はその意味でも、時宜に合った有益な情報を、我々に提供してくれるものであると言えるであろう。

〔注〕

- (1) 渡邊裕一「黒死病後の社会—繰り返すペスト被害と都市の疫病対策—」『経済研究所年報』2023年, 67頁.
- (2) ヨーロッパ中世史研究会編『西洋中世史料集』東京大学出版会, 2000年, 349頁.
- (3) 歴史学研究会編『世界史史料5 ヨーロッパ世界の成立と膨張』岩波書店, 2007年, 247頁.
- (4) 堀越宏一『ものと技術の弁証法』岩波書店, 2009年, 245～247頁.
- (5) 同上, 279頁.
- (6) 人と人との接触の困難による出会いの減少は婚姻数を減少させ, ポスト・コロナ社会に対する先行きの不安も相まって, 2022年の出生数は, 政府予測よりも11年も早く, 80万人割れを記録した. またコロナの緊急事態宣言が解消された2023年の出生数は, 統計上過去最低の75万8,631人であり, コロナによって加速度的に人口減少が進んでしまったことがわかるのである. 今後このまま少子化が進行すれば, 2050年には, 2005年の総人口よりも3,300万人減少する計算になる. さらに生産年齢人口は2005年の8,422万人から, 2050年には4,930万人になり, 40%強の大幅な減少になる見込みである. すなわちコロナ禍を経た日本社会は, ポスト・ペストのヨーロッパ社会と同等かそれ以上の労働人口の減少を経験することになるのである. 国土交通省「今後の社会・経済情勢の変化」2024年5月29日閲覧, <https://www.mlit.go.jp/common/000145138.pdf>
- (7) 厚生労働省の「令和5年民間主要企業春季賃上げ要求・妥結状況」によれば, 2023年の妥結額の平均賃上げ率は3.6%であり, これは2022年の2.2%を大きく上回る数値となった. 厚生労働省「第1表令和5年民間主要企業春季賃上げ要求・妥結状況」2024年5月29日閲覧, <https://www.mhlw.go.jp/content/12604000/001131821.pdf>